

齋王経験者の密通をめぐる歴史叙述と物語引用

——『今鏡』を中心に——

本橋 裕美

要旨

皇女の婚姻が否定される例として、齋王経験者である場合が挙げられる。後朱雀天皇皇女・娟子内親王の場合は、齋院経験者であることが婚姻を「密通」として捉えられる原因となった。そして、この密通を歴史物語が語る際には、『伊勢物語』が用いられる。『栄花物語』の引用による叙述方法を引き継いだ『今鏡』の方法を中心に、『伊勢物語』の世界と重ねられる皇女の密通について論じた。

はじめに

歴史叙述において、過去の例と比較しながら叙述対象を分析する方法はしばしば用いられる。中国の史書の伝統においても常識的な手法であり、日本においてもさまざまな記録でそうした方法が登場し、分析者の知のあり方を垣間見せる。仮名文学の中でも、先例との比較を通して今を理解しようとする思考方法があるのは必然なのだが、興味深いのは、その先例の中に物語が入ってくることである。物語文学が歴史を取り込んで大きく世界を広げたように、歴史物語を始めとする歴史叙述の方法もまた、物語世界を取り込もうとする。もちろん、物語を比較対象にする思考は目新しいものではない。物語に接することのできた層の女性たちが皆、行ってきた方法である。だが、それが思考の中だけでなく、文字として浮かび上がってきたことには改めて注目する意味があるだろう。それは物語の個々の作品の位相を明らかにすることも関わってくる。本稿では、元齋王の密通という点から、歴史叙述と物語の世界の関わりを検討する。

一、『今鏡』の物語引用の方法

元齋王の密通記事を検討する前に、『今鏡』が物語文学をどのように取り入れているかを見てみたい。『今鏡』の語り手は次のように紹介される。

親に侍りしは、生学生にて大学に侍りき。この女をも、若くては宮仕へなどせさせ侍りて、唐の歌、大和歌などよく作り詠み侍りしが、越の国の司におはせし御女に、式部の君と申しし人の、上東門院の後宮と申しし時、御母の鷹司殿に候ひ給ひし局に：

（『今鏡』序）

かの皇后宮の女房、肥後守元輔と申すが女清少納言とて、ことに情ある人に侍りしかば、常に罷り通ひなどして、かの宮の事も承りなれ侍りき。

（『今鏡』卷一）

『大鏡』の語り手・世継の孫であり、宮仕えを経験し、紫式部や清少納言と親しんだ経歴を持つ。『大鏡』における世継は高齢に設定され、歴史を「見た」

という確かさと同時に人物としての怪しきを含む存在だった。しかし、ここで登場する語り手「あやめ」は、より女性たちの世界に肉迫して生きた存在として語られる。

『今鏡』が引用する物語は、ほとんどが『源氏物語』であり、『伊勢物語』と『栄花物語』が散見される程度である。虚構文学として参照されるのは『源氏物語』に留まるが、『伊勢物語』についても、また歴史物語と称されるものであっても虚構性を抱えている点には留保しておきたい。まずは、『今鏡』が『源氏物語』を利用する代表的な例を見てみたい。

三宮（※輔仁親王）の御子は、中宮大夫師忠大納言の御娘の腹に、花園の左大臣（※有仁）とおはせしこそ。光源氏なども、かかる人をこそ申さまほしく覚え給ひしか。まだ幼くおはせし程は、若宮と申ししに、御能も御みめも、しかるべき事と見えて、人にもすぐれ給ひて、常に弾き物、吹き物などせさせ給ふ。（中略）

元永二年にや侍りけむ。仲の秋の頃、御年十七とかや申しけむ。初めて源氏の御姓賜りて、御名は有仁と聞えき。やがてその日、三位中将になり給ひき。その年の霜月の頃、中納言になり給ひて、やがて中納言中将と聞えき。昔も帝の御子、一の人の君達などおはすれど、かく四位五位なども聞え給はで、初めて三位中将になり給ひ、年の内に中納言中将などは、いとありがたくや侍らむ。（中略）

大將殿（※有仁）、年若くおはして、何事も傑れたる人にて、御心ばへもあてにおはして、昔はかかる人もやおはしけむ。この世にはめづらかに、斯くわざと物語などに作り出したらむやうにおはすれば、やさしくすきずきしき事多くて、これかれ、袖よりいろいろの薄様に書きたる文の、引き結びたるなつかしきども、二つ三つばかりづつ取り出して、つねに奉りなぞすれば、これかれ見給ひて、或るは歌詠み、色好む君たちなどに見せ合はせ給ひて、この手は勝りたり、歌などもとりどりに言ひ合へり、或るは、

見せ給はぬもあるべし。

又、兵衛督（※実能、有仁の妻の兄）や少将（※公教）たちなど参り給へば、かたみに女の事など言ひ合はせつつ、雨夜の静かなるにも、語らひ給ふ折もあるべし。（中略）

いと有り難く聞き奉りしに、まだ盛りにて雲隠れ給ひにけむ、いと悲しくこそ侍れ。 『今鏡』巻八「御子たち」

後三条天皇の孫にあたる源有仁は、光源氏に喩えられることで賞賛される。光源氏の現出として語られ、雨夜の品定めや「雲隠れ」で表現される死のイメージが重ねられていく。皇統から外れた二世源氏としては、却って業平や惟喬親王のイメージに近いが、細かい背景は切り捨てられ、光源氏に喩えて語りたという主張が優先される。こうした『今鏡』の物語引用を評して、山内益次郎氏は次のようにまとめる。

今鏡は作り物語—源氏物語—的色彩を加えて物語的効果をあげようとしているが、誇張や虚構を設けようとはせず、事実をまげてまで物語を面白くしようとはしなかった。大鏡より盛り上がりが少ないのは、物語の構成やその語り口によるものと思われるが、今鏡作者は物語的效果よりも事実を忠実に述べることに主眼を置いたものと思われる。〔山本 1972〕

こうした物語引用のあり方は他の例でも共通する。『今鏡』には、源有仁以外に次のような『源氏物語』引用がある。

- ・寵愛を受ける女を桐壺更衣に喩える
- （鳥羽院と美福門院（すべらぎの下）・崇徳天皇と兵衛の佐（御子たち））
- ・藤原忠通、重通が匂宮と薫に喩えられる（藤波の下）
- ・藤原公実の垣間見に夕顔巻が想起される（藤波の下）

だが、いずれも人物造型に深く関わるような引用の方法ではなく、むしろ細部を捨象して一場面のみを思い描かせるような方法となつていよう。史実を語つていこうとする『今鏡』の文体からすると、物語が織りなす複雑な人物造型や関わりは、却つて見るべき史実を見えなくしてしまうものであるのかもしれない。

二、問題の所在

物語引用の方法が有効に用いられているとは言い難い『今鏡』のあり方を確認した。『源氏物語』をはじめとする虚構世界の人物を借りる方法は、『今鏡』の歴史に対する忠実さの前に大きな展開を見せることはなかったといえる。しかし、本稿で取りあげる場面においては、物語世界そのものが重要な意味を持つ。分析対象としたいのは、『今鏡』における次の記述である。

次の姫宮は娟子内親王と申しき。長元九年霜月の頃、賀茂の齋院と聞えし程に罷り出で給ひける後、天喜五年などにやありけむ長月の頃、何処ともなく失せさせ給ひにければ、宮の内の人いかにすべしといふ事もなくて、明し暮しける程に、三条わたりなりける所に住み給ひけり。

始めは、人の扇に一文字を男の書き給へりけるを、女の書き添へさせ給へりければ、男また見て、一文字添へ給ふに、互ひに添へ給ひける程に、歌一つに書き果て給ひけるにより、心通ひ給ひて、夢か現なる事ども出で来て、心や合はせ給へりけむ、負ひ出し奉りて、やがてさて棲み給ひけり。

男答あるべしなど聞えけれど、人柄の品も、身の才などもおはして、世も許し聞ゆばかりなけるにや、諸共に心を合せ給へればにやありけむ、さこそ住み果て給ひけれ。男その程は宰相中将など申しけるとかや、後には左大臣までなり給へりき。

〔『今鏡』巻四「藤波の上」〕

ここで語られるのは、源俊房と娟子内親王の密通事件である。娟子内親王は後朱雀天皇と陽明門院禎子内親王との間の娘で、同母兄に後三条天皇、同母姉に良子内親王がいる。長元九年（一〇三六）、良子内親王は伊勢齋宮、娟子内親王は賀茂齋院に同時に卜定されており、同母姉妹が齋宮、齋院を占める珍しい例である。娟子内親王が退下後、男と通じることがあり、行方不明になったのち、そのまま男と住むようになったことを語る。扇に文字を書き添えて交流を深め、心を合わせて言わば駆け落ちしていく姿は物語的な叙述であり、事実、『伊勢物語』の表現を借りている。「夢か現なる事」には六九段（狩の使章段あるいは『古今和歌集』六四五、六四六番歌）、背負つて逃げたことは「負ひ出し奉りて」には六段（芥河草段）の影響を見ることが出来る。ここでの『伊勢物語』イメージが、史実の業平像としてあるのか、あるいは史実をもとにした物語であるかと捉えられているのかについてはひとまず置き、当該場面をさまざまな面から検討してみたい。

『今鏡』は娟子内親王の密通事件に強い関心を寄せていたようで、巻七「村上源氏」でも俊房について語る中でこの事件に触れている。

堀河殿（※源俊房）の御君達、大臣になり給はぬ口惜しく。東宮の大夫（※師頼）は一の大納言にて、時に遇ひ給へりしかば、なり給ふべかりしに、折節あきあふ事なくて、えならで失せ給ひにき。（中略）

宰相にて久しくおはせざらましかば、大臣にはなり給ひなまし。又「大殿の、齋を取り据ゑ給へりしかばにや、御末の官登り難くおはする」と申す人もあるとかや。

九条殿（※師輔）の北の方の宮（※康子内親王あるいは雅子内親王）も、便なき事なれど、それ、ただ宮ばかりにおはしき。これは齋に居給へる人を、籠め据ゑ給へりし、類なくや。業平の中将も「夢かうつつか」の事にて止みにけり。道雅の三位も「ゆふしで掛けしいにしへに」など言ひて、忍びたる事にこそ侍りけれ。これは、盗み出して取り据ゑ給へれど、これ

は業平中將には変りて、前のなれば、さまで過りならずやあらむ。齋宮の女御なども、又、齋のおり給ひて、后になり給へるもおはせずやはある。又、大臣まで主人の登り給ひにしかば、末の難かるべきにもあらず。おのづからの事なるべし。『今鏡』巻七「村上源氏」

右の記事では、俊房の子どもたちの官位がなかなか進まないことの原因を、齋院であった娟子内親王との密通事件に求めている。興味深いのは、齋院経験者との婚姻が過去の例を広く引き寄せてくることである。師輔と北の方、業平、藤原道雅、村上天皇女御・徽子女王まで、個別の状況がかなり異なる事例までも広く引き合いに出してくる。本稿では、この娟子内親王の密通事件をめぐる『今鏡』について、引用の方法から考えていく。

三、娟子内親王について — 『栄花物語』との比較 —

娟子内親王と俊房の密通事件が起こったのは天喜五年（一〇五七）とされているが、はっきりしない。俊房に降嫁したことについては、薨去記事などに見られ、確実といえよう。

『栄花物語』続編には、次のようなかたちでこの密通事件に関する記事がある。

源大納言（※源師房）の御太郎君は、新中納言俊房と聞ゆる。かの朱雀院の二の宮は、前齋院とて、皇太后宮と一つ所におはしますに、御乳母子を語らひて、忍び忍びに参りたまひけり。さて、忍びて迎へたてまつらせたまひてければ、内、東宮いと便なきものに思しめしたるなかにも、東宮は一つ御腹におはしまして、心やましくめざましう思しめして、内にも「一人かくのみ思ひはべるべきことにもあらず」と、いみじく申させたまへば、かこまりてものしたまふを、なほ飽かず、「これよりまさりたらん罪にも

ありなん」と、いたく申させたまへば、いかなることかと、大納言は思し嘆かせたまふ。六条にいとをかしき所、大納言の領ぜさせたまひけるにぞ、おはしませたまひける。大宮をも、「すべて御文など通はせたまふな」と、東宮のいみじく申させたまへば、いとかなしくしたてまつらせたまひしかど、かき絶えておはします。大納言の上、よろづにあつかひ申させたまふ。宮の御有様いとめでたくをかしげにおはします。中納言、物語の男君の心地したまひて、いとあてやかになまめかしき御様なり。

（『栄花物語』巻第三七 けぶりの後）

女房と通じた俊房が、禎子内親王のもとにいた娟子内親王と密通し、こっそり自邸に引き取ったと語られる。記事の中心は、娟子内親王の同母兄・東宮（後三条天皇）の怒りである。東宮の激しい怒りに対して、俊房の父である師房も苦悩し、また母禎子内親王も手紙の遣り取りさえ止められる。いわば、娟子内親王の皇女としての立場を切り離そうとしたのである。『今鏡』においても俊房の官位をめぐる記述があり、娟子内親王との密通の余波という点では共通する。しかし、『今鏡』も参照したであろう、この『栄花物語』の記事は、俊房の有様を「物語の男君の心地」とする程度で、物語引用を用いた描写は行っていない。また、扇に文字を書き付け合うという二人の交流を示す記述もなく、語りの方角としてはかなり距離があるといえよう。

『今鏡』の娟子内親王に関する叙述に強い影響を与えたと思われるのは、実はこの娟子内親王自身の記事ではない。『栄花物語』が語るもう一つの元齋王の密通事件、当子内親王をめぐる記事である。

かかるほどに、前齋宮上らせたまいて、皇后宮のおはします宮は狭しとて、またしらせたまふ所にぞおはしませたまひける。年ごろにいとおとなびさせたまへる御有様も、いみじくおろかならず思し見たてまつらせたまへれど、ほかにしばしとておはしませたまひけるほどに、帥殿の松君

の三位中将、いかがしけん、まゐり通ふといふこと世に聞えて、ささめき騒げば、宮いみじく思し嘆かせたまふほどに、院にも聞こしめしてけり。(中略)さて院には、皇后宮めざましく思しめされて、人知れずいみじう思し嘆かせたまへど、まことそらごと知りがたき御事なれど、世にかく漏り聞えたるに、院の御気色のいとみじきなり。①かの在五中将の、一心の闇にまどひにき夢現とは世人定めよ」など詠みたりしも、かやうのことぞかし。それはまだまことの齋宮にておはせしをりのことなり。されど、これぞ前の齋宮と聞えさすれば、あながちに恐ろしかるべきことにもあらねど、院のいときはだけく思しのたまはするが、いとかたはらいたきになん。皇后宮いといみじう思し乱れたるに、宮々の御気色もいといみじきに、東宮もいみじく心やましげに思し乱るべし。

かくて前齋宮いと若き御心地に、このこといと聞きにくく思さるれば、いかにせんと人知れず思し嘆かれて、②御覽ぜし伊勢の千尋の底の空せ貝恋しくのみ思されて、しほたれわたらせたまふに、げにわりなき御濡衣も心苦しきに、三位中将は跡絶えて、わりなくのみ思ひ乱れて、風につけたりけるにや、かくてまゐらせたりける。

榊葉のゆふしでかげのそのかみに押し返しても似たるころかな
人知れぬことも多かめれど、世に聞えねばまねびがたし。また高欄に結びつけたまへりける、

陸奥の緒絶えの橋やこれならん踏みみ踏まずみ心まどはず

宮、「③ふるの社の」など思されて、あはれなる夕暮に、御手づから尼にならせたまひぬ。④またあはれに昔の物語に似たる御事どもなり。皇后宮聞きにくかりつれど、いみじう悲しう思さるることもおろかなり。院は聞きめして、雄々しき心は、ひたみちに、あへなん、めざましかりつるよりはと思されけり。

『栄花物語』巻第一三 　ゆふしで

当子内親王は三条天皇の娘で齋宮経験者、母は皇后城子で、同母兄弟に東宮・敦明親王（のちの小一条院）がいる。境遇が娟子内親王と極めて近い。当子内親王の場合、相手は「帥殿の松君の三位中将」、つまり藤原伊周の息子である藤原道雅であった。すでに道長へと政権が移って久しい後一条天皇朝において、道雅の政治的立場は弱く、三条院や敦明親王にとつてもメリットの薄い婚姻であり、二人の関係は密通として位置づけられる。結果的に、当子内親王は自ら手で髪を下ろし、尼となったと語られる。

この二人の関係を『栄花物語』が語るにあたって、傍線部①で「在五中将」すなわち業平の例が引かれていることは特徴的である。業平とは違い、齋宮在任中のことではないと註釈をつけるものの、やはり前齋宮であることは憚られる事態なのだ。三条院の怒りに焦点を移す。続く「ゆふしで」巻頭では、彼女が伊勢に過ごしたことを再度思い起こさせる描写（②）、『齋宮女御集』に載る次の、

世中そむく人のおほかるころ、女御

みな人のそむきはてぬる世中にふるのやしろのみをいかにせむ（二六〇）

を引いて、同じく齋宮経験者である村上天皇女御の徽子女王の例を呼び起こす。まさに④「昔物語」に彩られるかたちで、当子内親王の物語は語られていく。

ちなみに、『小右記』では、当子内親王は病を理由にして寛仁元年（一〇一七）十一月に出家したとされており、『栄花物語』が父三条院生前のこととして彼女の出家を語るのとずれが生じる。『小右記』の記載の方が蓋然性は高いが、『大鏡』も当子内親王については独自の叙述がある。

この宮たちの御妹の女宮たち二人、一所は、やがて三条院の御時の齋宮にて下らせたまひにしを、上らせたまひて後、荒三位道雅の君に名だたせたまひにければ、三条院も御悩の折、いとあさましきことに思し嘆きて、尼

になしたまひてうせたまひにき。

〔『大鏡』師尹伝〕

『大鏡』では当子内親王が三条院の意志で出家させられたように語られる。娟子内親王より一世代以上前に人々が噂したのであろう当子内親王をめぐる一大スキヤンダルは、中関白家の更なる没落と三条院の失意とを象徴する出来事として取り上げられていくのである。

四、『今鏡』娟子内親王記事の再検討

改めて、『今鏡』の娟子内親王記事に戻りたい。娟子内親王をめぐる叙述が、当子内親王のスキヤンダル、特に業平、『伊勢物語』との親和性という点では、『栄花物語』からの影響が強いことが明らかである。「村上源氏」の記述を一部再掲する。

①九条殿の北の方の宮も、便なき事なれど、それ、ただ宮ばかりにおはしき。これは齋に居給へる人を、籠め据多給へりし、類なくや。②業平の中将も「夢かうつつか」の事にて止みにけり。③道雅の三位も「ゆふしで掛けしいにしへに」など言ひて、忍びたる事にこそ侍りけれ。これは、盗み出して取り据多給へれど、これは業平中将には変りて、前のなれば、さまで過りならずやあらむ。④齋宮の女御なども、又、齋のおり給ひて、后になり給へるもおはせずやはある。又、⑤大臣まで主人の登り給ひにしければ、末の難かるべきにもあらず。おのづからの事なるべし。

〔『今鏡』巻七「村上源氏」〕

右の記事の興味深い点は、先例を挙げながらも当てはまらないとして切り捨てていくことである。順を追ってみたい。

①師輔の例

師輔には、醍醐天皇皇女で齋宮経験者の稚子内親王と、同じく醍醐天皇皇女・康子内親王が二人降嫁している。「ただ宮ばかり」と語られることからすれば、康子内親王とみる方が適切だろう。『大鏡』では、師輔の密通を次のように語る。

このおほきおとどの御母上は、延喜の帝の御女、四宮と聞こえさせき。延喜、いみじうときめかせ、思ひたてまつらせたまへりき。(中略)二代の帝の御妹におはします。

内住みして、かしづかれおはしまししを、九条殿は女房をかたらひて、みそかにまゐりたまへりぞかし。世の人、便なきことに申し、村上のすべらぎも、やすからぬことに思し召しおはしましけれど、色に出でて、咎め仰せられずなりにしも、この九条殿の御おぼえのかぎりなきによりてなり。

〔『大鏡』公季伝〕

密通を語る描写として共通性があるが、師輔の場合は黙認というかたちで婚姻が認められている。康子内親王は出産の際に死去したが、円満な夫婦関係であったことが語られていく。この例からは、まず皇女に密通することの問題が審議され、ただの皇女の場合は許されるとしながら、「齋に居給へる人を、籠め据多給へりし、類なくや」と娟子内親王を盗み出した俊房の事例の分析を進めていく。

②業平の例

師輔に続くのは、業平の例である。先掲の「藤波の上」の娟子内親王記事でも『伊勢物語』がモチーフに使われていた。ここでは、「夢かうつつか」という言葉で『古今和歌集』あるいは『伊勢物語』を引く。『栄花物語』が引くのは明らかに『古今和歌集』だが、『伊勢物語』六九段も合わせて見ておきたい。

又のあしたに人やるすべなくて思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりける
よみ人しらす

きみやよし我や行きけむおもほえず夢かうつつかねてかさめてか
返し
なりひらの朝臣

かきくらす心のやみに迷ひにき夢うつつとは世人さだめよ

『古今和歌集』卷一三 恋歌三 六四五—六

むかし、男ありけり。その男、伊勢の国に狩の使にいきけるに、かの伊勢の齋宮なりける人の親、「つねの使よりは、この人よくいたはれ」といひやりければ、親の言なりければ、いとねむごろにいたはりけり。朝には狩にいだしたててやり、夕さはかへりつつ、そこに来させけり。かくて、ねむごろにいたつきけり。二日といふ夜、男、われて「あはむ」といふ。女もはた、いとあはじとも思へらず。されど、人目しげければ、えあはず。使ざねとある人なれば、遠くも宿さず。女のねや近くありければ、女、人をしづめて、子一つばかりに、男のもとに來たりけり。男はた、寝られざりければ、外の方を見いだしてふせるに、月のおぼろなるに、小さき童をさきに立てて人立てり。男、いとうれしくて、わが寝る所に率て入りて、子一つより丑三つまであるに、まだ何ごと語らはぬにかへりにけり。男、いとかなしくて、寝ずなりにけり。つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにあらねば、いと心もとなくて待ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のもとより、詞はなくて、

君や来しわれやゆきけむおもほえず夢かうつつか寝てかさめてか
男、いといたう泣きてよめる、

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとは今宵さだめよ

とよみてやりて、狩にいでぬ。(中略) 明くれば尾張の国へこえにけり。齋宮は水の尾の御時、文徳天皇の御女、惟喬の親王の妹。 (『伊勢物語』)

在任中の齋王と関係した数少ない先例であり、齋王に関わる文学としてはも

つとも人口に膾炙していよう。実際、東下りの背景に罪があるという位相でしかわからず、公的な処罰の記録もない。このような事件があったかどうかは定かでないが、『今鏡』が「止みにけり」というように、業平の官位が十分に上がらず、不遇に終わったことの原因と解されていたことが窺える。

③道雅の三位

『大鏡』『栄花物語』に共通する先掲の例だが、道雅と当子内親王の関係が「忍びたる事」である点で比較していく。娟子内親王の場合は俊房に盗み出されており、罪としては重い。しかし、業平と違って齋王経験者というだけのことであると述べる。問題がずらされてはいるが、俊房擁護の文脈が形成される。

④齋宮女御の例

重明親王の娘で齋宮として伊勢に派遣されたのち、帰京して村上天皇後宮に入内した徽子女王の例が出される。齋宮が帰京後、入内した例は多くはなく、本来ならば降嫁とは別の文脈を抱えている例であろう。むしろ、天皇も婚姻しているのだから許されるという方向に進むところに、天皇に対する意識の変革をも見ることが出来る。齋王が天皇家のものであるという認識がなく、降嫁と入内が同じ位相で捉えられるとすれば、齋宮・齋院制度自体も大きく変容しているといえよう。

この四つの例を挙げながら、俊房に対して強い咎めがなく、また大臣まで昇ったことが理由づけられていく。先例と比較しながら位置づけていくという点で、『栄花物語』と同じ方法で論じているといえよう。異なるのは、先例の数が増えていることだ。それは、より説得的な先例を求めつつも噛み合わないままに次の例へと移行していく論じ方によるもので、結局は⑤のように、俊房自身は大臣まで昇ったのだから密通事件の影響は限定的で、その子どもたちの官位が振るわないのは彼らの資質の問題だと結論づけることになる。

おわりに―業平・齋宮幻想からの逸脱

最後に改めて、当子内親王の例と娟子内親王をめぐる問題を位置づけていきたい。『今鏡』が娟子内親王の密通事件に強く興味を持っていたこと、それを『栄花物語』の当子内親王の例に倣って『伊勢物語』によって彩ろうとしたことを論じてきた。だが、娟子内親王をめぐる語りは、『栄花物語』当子内親王の物語のように、『伊勢物語』の文脈では説明しきることができずに、皇女の結婚や齋王経験者の結婚の例へとスライドさせていく。この記述をどのように評価していくべきだろうか。

実のところ、当子内親王をめぐる語りで業平の例が持ち出されたのは、本来咎められるべきではない「元」齋王への恋が、天皇の激しい怒りを買ひ、道雅のみならず当子内親王の出家までも引き起こしたことによる。その怒りの原因をめぐって引き合いに出されたのが、在任中の齋宮と通じた業平の例である。罪の度合いは低いにも関わらず、二人を取り巻く不遇、更にそれに怒る三条天皇の不遇の重さが照射される。だからこそ、彼女が「前の」齋宮として伊勢にいたことが強調され、『齋宮女御集』の歌が引用されるのである。

だが、『今鏡』の例では、結論として重い咎めを受けたわけではない。それどころか、師輔と康子内親王の例が思い起こされた如く平穏な婚姻生活を送った可能性が高く、いくら『栄花物語』の語りを模倣しようとしても、それを用いて語るべき悲哀が霧散してしまうのである。息子たちの不遇を語るうにも、最初に先例と比較すれば、俊房の密通事件に原因を求めるのは難しくなる。『栄花物語』と『伊勢物語』を二重写しにして語ろうとする意図がありながら、一方で事実を正確に伝えようとする姿勢が、語りの世界観を分散させてしまうのである。

娟子内親王をめぐる語りが『栄花物語』で示したような物語的な広がりを見せないのは、一面では『今鏡』の語りの限界を明らかにしている。だが、齋

王経験者の婚姻を語る方法という点では、齋宮・齋院の物語が『伊勢物語』六九段の業平と齋宮の幻想から解放される可能性を意味するのではないか。齋王たちを語る際には、それが退下後であっても密通の物語として位置づけられてきたし、密通がなければ語られないといっても過言ではなかった。だが、『今鏡』が苦悩しながらも明らかにしたように、娟子内親王と俊房の物語は、齋王を用いなくとも語ることができるのである。業平の物語は、物語の中でも、歴史語りの中でも、そして文字化されない人々の思考の中にも影響を与えてきた。齋王制度はこのちも続いていくが、院政期には齋王の上位に侵犯されない最高位の皇族女性として女院が置かれ、齋王は女院に至る段階的な役割としても機能するようになる。『今鏡』が語る娟子内親王の事例は、そうした変容する齋王のあり方の萌芽として見るべきであろう。

※『今鏡』の本文は、海野泰男『今鏡全釈』福武書店、竹鼻績『今鏡全訳注』講談社学術文庫、河北騰『今鏡全注釈』笠間書店を参考に私に改めた。『栄花物語』『大鏡』の本文は「新編日本古典文学全集」（小学館）に依った。

参考文献

- 『海野 1997』…海野泰男「今鏡研究の動向」(『歴史物語講座 第四巻 今鏡』風間書房 一九九七)
- 『深澤 1991』…深澤三千男「『今鏡』もしくは歴史の謎」(『伝承の古層―歴史・軍記・神話』桜楓社 一九九一・五)
- 『福田 2010』…福田景道「歴史物語の語り手設定の継承と展開」(『島根大学社会福祉論集』3 二〇一〇・三)
- 『三田村 2008』…三田村雅子『記憶の中の源氏物語』新潮社 二〇〇八
- 『山本 1972』…山内益次郎「源有仁考―今鏡列伝の構成と典拠―」(『白梅学園大学紀要』八 一九七二)